



第3号  
昭和60年11月

古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 ACT内

定期講演会のご案内

日時 昭和60年12月1日(日)

午後1時~5時

場所 東京都勤労福祉会館集会所

電話 03-552-1913

(中央区新富一-十三-十四)

地下鉄日比谷線 八丁堀駅下

車30米)

演題 「楽浪文化と多賀城碑」

講師 古田武彦氏

会費 千二百円(会員千円)

連絡先 朝日トラベル内事務局(03-542-7456)

(講演要旨)

一、古田先生は、ここ、三、四年のうち中国・韓国・南米エクアドルと海外視察があいつぎ、多忙をきわめました。大変元気に活躍しておられます。

このうち、中国での王健群氏、大阪での北朝鮮国学者との討論内容につき簡単に説明されます。

二、次いで、演題の導入という観点から、最近北朝鮮学者が来日して大阪・阪急デパートで実施された高句麗文化展で先生が受けた感想を古田史学の観点から中間報告的に説明していただきます。

三、つぎに、本題である多賀城碑について時間をかけた説明があります。まずは聞いてのお楽しみという事です。この碑は従来、歴史学上信憑性不明とされてきた石碑で、先生が独自の分析視覚から解明に取り組みます。なかでも、北海道・東北の「蝦夷国」との関係があるのではという問題にも触れる予定です。

「懇談会」を催すことについて

恒例により、講演会終了後懇談会を開きます。講演会で話しつくせなかつた点や、その他の最新情報につき興味のない話しがたくさん聞けそうです。奮ってご参加下さい。(参加費) 二千円

古田先生新著書紹介

「古代史を疑う」(駱々堂出版・一、三〇〇円)

本書には、古田氏の最近の古代史研究成果が十編に分けて収められています。

「その一」 疑考・小林秀雄——本居宣長論

「その二」 疑考・柳田国男——歴史民俗学論

「その三」 疑考・柿本人麻呂——万葉論

「その四」 疑考・大國主命——「大國古事記」論

「その五」 疑考・万葉集——大王之速乃朝庭

「その六」 疑考・好太王碑——王健群説をめぐって

「その七」 疑考・「古代出雲」論

「その八」 疑考・「古代出雲」不信論——未来像への試行

「その九」 疑考・「エバンス説」不問主義——スミソニアンへの訪問

「評」 伝 陳寿伝

これらの論文のうち、はじめの四編は、季刊「円卓会議」(駱々堂)という雑誌に、「古代史の弁明」の通題で連載されたものです。雑誌が廃刊になったため、続編を含めて一冊にまとめられたものが本書です。

古田文化講演会開催中

—NHK教養講座、12月まで継続—  
59年12月より開始されたNHK教養講座「邪馬台国」の謎は、毎月一回、12月まで実施されます。  
11月12日(火)、12月10日(火)いずれも午後6時30分~20時まで。  
場所 町田市原町田6-13-21  
長崎屋シヤルビル4階  
NHK文化センター町田教室  
電話 0427-26-0111

古田先生推撰著書紹介

「大阪史蹟散歩」——遺跡は私たちに何を訴えているか——

大阪は豪商の町であった。その伝統を継ぎ書肆をこの町に営む中谷さんは、「志商」といふべき人。読み終つてそう思った。単なる地誌に非ず著者の人柄がにじみ、感動的である。心筋硬塞の重症を押しでの完成を喜びたい。(市民の古代研究会名誉会長。限定三百部) 古田武彦

カベラ書店 大阪市北区堂島浜通り一-二-16 新大ビル内  
TEL 06 (三四四) 一八八七

修験道史料にみる「九州年号」(一) 八王子市 谷本 茂

修験道という語から私達が連想するのは、時代劇の中で、訳の分からない呪文をと覚えて祈禱する山伏の儀礼化した行事にしても、修験道の生きた信仰と精神が変化衰退した末端であるとされているから、仏教や神道に比べて、修験道は、はるか傍流の存在としか意識されていないことは確かである。

しかし、古代・中世の文献を一瞥するだけで、山岳宗教としての修験道が、仏教・神道とも密接な関連をもつことが知られる。近年、修験道研究への関心が高まっているというが、本格的な研究は、始まったばかりという状況なのだそうである。

最近、名著出版の山岳宗教史研究叢書の中に、修験道史料集が収められ、各地に存在する修験寺院霊山の縁起が手軽に参照可能となった。これらの史料の中に、「九州年号」が見られるが、その幾つかについて次に述べる。

近畿地方で、「九州年号」に関係ある史料として、まず、「笠置寺縁起」がある。(成立年代不詳。十五世紀か。古縁起は十二世紀前半以前に成立。笠置寺は京都府相楽郡笠置町にある。)

白鳳十一年辛御建立云々。天智天皇治十年辛同之。  
 役優婆塞。白鳳十二年卯月廿四日登當山詣千手窟。則北峯一代之峯始行給者也。

これらの白鳳年号は、白鳳元年を齊明天皇七年(辛酉)とする系統のものである。

さらに、箕面寺も大いに「九州年号」と関係が深い。古縁起らしい「箕面縁起」が「一代要記」(十四世紀前半成立)に引用されており、その中に、白鳳、朱鳥などの年号が見える。「箕面寺秘密縁起」(十七世紀中頃成立か。箕面寺は大阪府箕面市)には、次の様な条がある。

舒明天皇御宇、正徳六年甲春正月一日……  
 孝徳天皇御宇、白雉元年庚歲次壬

子冬十月十七日……  
 天武天皇御宇、白鳳元年壬申春二月四日己巳……  
 持統天皇御宇、朱鳥八年歲次甲午春正月八日……

最初の正徳という年号は、江戸時代の年号(一七一―一七一一六)とは別のものであり、「九州年号」の聖徳に当たるものと思われる。

二番目の白雉の例は興味深い。本文は、白雉元年を壬子とし、細注は庚戌とする。(後者は「日本書紀」の紀年に同じ。)

三番目の白鳳元年を壬申とするのは、「多武峯略記」「皇帝年代記」(「愚管抄」所引)と同じ系統のものである。

最後の朱鳥八年を甲午とするものは、「海東諸國紀」などの紀年と一年ずれている。

「箕面寺秘密縁起」は三巻からなる縁起絵巻であるが、各巻に異系統の「九州年号」が現われる点、慎重な史料批判が必要となる。 (この項つづく)

「好太王碑・高句麗遺跡への旅」

文京区 藤沢 徹 同行記

「好太王碑」が改ざんされている点では、意見が一致した訳ですね。次に、好太王碑に何回も出てくる倭の正体は何でしょうか。

古田先生の声は力強く響く。通訳がまだるこしくなった王健群先生は流暢な日本語で話し始めた。

「大和朝廷軍ではないと思います。海盜すなわち海賊ですね。北九州地方のどこから来たのだと思います。」

「では、意見はかなり近くなりましたね。」と古田先生。

古田先生にとっては、三月に続いて今年二度目の王健群先生との会談である。私たちは今、長春(旧新京)の吉林省文物考古研究所の二階会議室で、お二人の議論を固唾を飲んで拝聴しているのだ。

古田先生は、「倭―九州王朝」を力説しておられるのだが、慎重な王先生は仲々承知しない。

「ボウオー」すぐ下をSLが汽笛を鳴らし通過した。ここは元満州国皇



好太王碑前で乾杯

帝の偽皇宮で、裏庭を旧満鉄が通っている。蟬しぐれがひとしきり大きくなった。窓の外の緑が眩しい。

昨日(八月十八日)午後三時に、北京を発った直快列車は、山海関、瀋陽(奉天)を経て早朝六時に長春に着いたのだ。

ホームに降り立つと、半袖半ズボンの身に冷気はしみわたり、旧満州の首都の佇まいを保つ広い道路とくすんだ煉瓦の建物を見て我々は感慨にふけた。バスでは通訳が昔の大和ホテルや関東軍司令部を教えてく

れた。一行は、古田先生と竹野さんなど十四人である。

長春から吉林、通化を経由して集安にやっと到着したのは、三日後の二十二日だった。長い道程だった。通化からは、西日本の考古学研究グループと同行したが、いち早く進行方向の左側を占領され、カメラポジションをとられてしまった。目的地の集安に近づくとテッキや窓から鈴なりになってカメラを構えたとたんトンネルで、煙にすっかりいぶされてしまった。防雪林の間から高梁や玉蜀黍島が眼下に広がり、青くけむる北朝鮮の山なみが聳え立つと將軍塚はじめ無数の古墳が展開し、皆は夢中でシャッターを切り続けた。

集安(輯安、通溝)は、鴨綠江中流の北岸にあり、数多くの古代遺跡を持つ高句麗の昔の都城(三丁四二七年)である。国内とも呼ばれ、丸都山城を後背山地に持っている。

好太王碑は、集安の国内城と呼ばれる市街から東北約四キロにあり、高さ六メートル余の自然石に、千五百程の文字が彫ってある。四一四年に高句麗の長寿王が父「国岡上広開土境平安好太王」談徳を称えて建立した顕彰碑である。これは、四世紀の金石文として、第一級の時代資料で、まさに王者とも云えよう。

マイクロバスにゆられ、ようやく好太王碑にたどりついた我々は、碑面を食いつくように眺め、撫で廻し、距離をおきながらも写真を撮りまくった。そのうち、成田から持参した日本酒「白鶴」一升瓶二本で、乾杯し、大酒宴となった。

感激さめやらぬまま、連夜古田先生から講義を聞き多くを学んだ。碑文の約半分を占める守墓人の話の中で、「旧民」といつているのは恐らくギリヤークかオロッコなど、射日神話や、禹山（集安の北にある美しい山で、神南備山の要素を持つ、別名如山）信仰を持つ古代文明の人々だったろうというところは、現地にいるだけ一層印象が深かった。

今度の旅行では、すっかり竹野さんに御苦労をかけてしまった。通化では、断水中のホテルに水を出せと市長に交渉し、集安では、勝手に見学地を削るのを吉林旅行社と長距離電話でかけあってくれた。お蔭で我々は、古墳壁画などを堪能できた。

### 長江幻想

横浜市 田島芳郎

この8月、古田先生は竹野恵三氏らと好太王碑におもむかれ、長春では王健群氏とも再会されて、多大な成果をあげられたようです。その頃私も別に中国を歩いておりましたので、その報告を致します。

一人旅でしたが、行く先々で運よく当日や翌日の切符が取れ、旅はスムーズに進みました。空港バスから市バスに乗り継ぎ、長江の乗船場へ行くと翌朝7時発の船の切符が手に入ったので、船上宿泊の手続きをして蚕棚ベツトで眠ると、目が覚めたら出港してました。

長江下りの初日は万県までで、二日目は有名な三峡を通過して夕方宜昌に着きます。三日目の朝9時頃、赤壁を通過しました。8月は増水期で

もありませんが、このあたり川幅は非常に広くて、3キロメートルはあるように感じられました。これは「三国志」にある「赤壁の戦い」が短里ではないかとした古田説に反するのですが、長江中流域でもっとも川幅の狭い武漢でも約1キロあるので、すから、当然かもしれないですね。船はその日の午後3時に武漢に着き2泊。再び船で九江へ下り、そこから列車で南昌へ出ました。

その後江南を巡って帰国しましたが、通勤電車の中で藤堂明保氏の中国旅行記を読んでいて、驚くことがありました。蘇州に劍池という名所があり、私も行きましたが、藤堂氏はそのいわれを説く中で「史記」の注に引用された「越絶書」を持ち出し、池の広さを六十歩と誇張して述べられていると言われるのです。

この記述は私もはじめて気がついたのですが、リアルなところ劍池の奥行きは15メートルほどで、まさに短里の六十歩なのです。しかも深さは一丈五尺で、これが誇張でないことは明白です。ひとつの書物がひとつの池について、深さは事実を書き、広さは6倍に誇張するなどというところがありえまじょうか。

これがリアルな表現とすれば、短歩の実例になります。径百余歩と伝えられる卑弥呼の墓を推測する手掛かりとなるでしょう。

それでは赤壁はどうなのでしょう。私の見た限りでは「三国志」の赤壁の記述は長里です。そこで推理しますと、赤壁の戦いは西暦二〇八年、つまり漢の献帝の時代の事件で

すから、当然記録も長里で行われていたのではないかと思われまます。曹操が魏王となるのが二一三年、魏が漢に取って替わるのが二二〇年ですから、短里はその頃復活したのではないかと思うのです。

仄聞するところ、赤壁は陸上からも観光できるようになったとか。できれば戦いのあったと同じ12月に行つて、じっくり眺めてみたいものです。そしてできれば劍池の奥行きと深さを実測したい。そんなことを考えながら、中国の旅を思い出しています。

### ことばの考古学

武蔵野市 毛利一郎

（承前）大國主のクニと大穴牟遲（紀では大己貴）のナが対応するといふのが、この論文の発想の原点であった。そのクニが「故郷のおふるろ」といふような用法があることを前回書いたが、ではナには故郷という用法はないか。あります。産土（ウブス・ナ）従って産土神は生れ故郷の守り神であり、近世以降には氏神や鎮守の神と同義語となった。

ウブスはMBの法則でウムスと転音の関係にあり、万葉の「草むす屍」や国歌君が代の「苔のむすまで」のムス（生す、産す）は、そのウムスの約（広辞苑）である。高御産巢日の神、神産巢日の神（日本書紀の一書では、高皇産靈の尊、神皇産靈の尊）の産巢日、産靈のムスも同様。現代語ではムスコ、ムスメがある。

ウブスナのナは、ツングース・満州諸語のナ（土地、地方の意）と同源であろうとされる（村山七郎氏

著「日本語の起源をめぐる論争」）。ウブスナは稲を産む土地といふのが原意であろうが、その点、稲を産む奇しき土地すなわち奇土と共通しているといえよう。

古代のナは江戸時代には名主の名として姿を現わしたが、もとより内容は変質している。名は中世には名と呉音読みされて、武士というものがそれに携つて発生した、いわゆる「一所懸命の地」となった。名の所有者を名主と言ひ、大名小名という語はこれから出た。名主の代理つまり名代や、名の地名を名主の姓とした名主（苗字とも）は今日でも生きて使われている。大阪府警に明主さんという情報管理課長がおられる（60年7月現在）が、この姓も名主から変化したものであろう。

平安朝初期の古文書に現れている名は、それまでの律令体制下の農村の政治関係をつき崩すものであったが、徴税のためには名を単位とすることを国術の側も法的に認めざるを得ないものであった（永原慶二氏著「日本封建社会論」）。それは国術領と莊園とを問わず発生した。名は名前ではなく、耕地をさすものである、と

永原氏も書かれるように、名の語源は紛らわしい。名は「平安時代以降、中世を通じて莊園・国術領の賦課単位。開墾、買得、あるいは領主の手による編成など種々の原因で成立した一定規模の田地に、年貢・課役等の納入責任者の名を冠して（例えば有友名のように称し）その権利を表明したものの。その持主を名主と呼んだ」（広辞苑）。ここからうっかりすると持主の有友という人の名前をつ

けたから、その種の耕地を名と呼んだと錯覚を起しかねない。私は、稲を産む土地を呼ぶナという古語があり、それに当てた漢字の名を呉音読みしたものと考ええる。名主は平常は作人その他を指揮して農耕を営むが、非常の際には自分の名字の地を守るために武装し、その作人らを郎党として出陣する。

余談だが、小さな名主は合戦の時その手勢を率いて一方の旗頭たる大名主のもとへ馳せ参じる。この馳せ参じることを馳走という(司馬遼太郎氏説)。この馳走を受ける大名主にとっては一騎でも多く兵力が欲しいところだから何よりも有難い馳走であって「汝、いしくも参りたり」(よくぞ来てくれた)と賞美することになる。この「いし」という形容詞が後に口語化して美味の意の「おいしい」となり、馳走が供応の意になつて「おいしい馳走」という用語に転化する。馳走を供応の準備に走り回ることとする俗説は誤りであろう。

### 斑鳩寺草創の問題

大田区 大越邦生

一、丁卯年草創説は正しいか  
古田武彦氏は著書「古代は輝いていた」(第三卷)の中で釈迦三尊像銘文の研究を行い、法隆寺文献分析のヒントを与えてくれている。私の注目する古田氏の説は次の二点だ。

(一)「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」(以下「法隆寺資財帳」と記す)中の聖徳太子を表す「上宮聖徳法王」の名称は、多利思北孤(上宮法皇)と聖徳太子を結びつけるための造語である。

(二)「法隆寺資財帳」は法隆寺と天皇家を結びつけるため著述された書である。

古田説にもとづき、法隆寺草創の問題について考察を加えてみたい。「法隆寺資財帳」には法隆寺創建年が記されている。はたしてこの記事は正しいだろうか。記事の信憑性について検討しよう。

#### 東宮上宮聖徳法王とは

釈迦三尊像にある「上宮法皇」の名称は、「法隆寺資財帳」で次のような変化を示している。

- ① 上宮法皇 (釈迦三尊像銘文)
- ② 上宮聖徳法王
- ③ 法隆寺資財帳釈迦三尊像記事 (葉師像銘文)
- ④ 東宮上宮聖徳法王 (葉師像銘文)
- ⑤ 東宮上宮聖徳法王 (法隆寺資財帳法隆寺創建記事)
- ⑥ ③はどちらも金石文である。②は古田氏により述べられている。
- ⑦ 「上宮聖徳法王」は「上宮法皇」聖徳太子」という解釈にもとづく思想的新造語であった。

ここで今問題にするのは④⑤である。「法隆寺資財帳」の④は葉師像記事、⑤は法隆寺を含む七寺建立記事である。原文を示そう。

金泥銅葉師像登具  
右奉為池辺大宮御宇天皇  
小治田大宮御宇天皇  
并東宮上宮聖徳法王  
丁卯年敬造請坐者  
金泥銅葉師像一具(葉師像記事)  
歳次丁卯  
小治田大宮御宇天皇

并東宮上宮聖徳法王  
法隆寺問寺、并四天王寺、  
中宮尼寺、橘尼寺、蜂岳寺、  
池後尼寺、葛城尼寺、敬造仕奉  
(法隆寺創建記事)

④で「東宮上宮聖徳法王」の名称が成立した理由は一目瞭然であろう。②と③の接合が行われたのである。(②③④)のその理解により初めて「東宮上宮」の語の意味が了解されるのである。その解釈に立つと、①から⑤に到る「法隆寺資財帳」の造語の順序性はもはや動かしようがないことがわかる。

丁卯年創建記事とは  
「法隆寺資財帳」において「葉師像記事」は葉師像銘文にもとづき書かれていた。では法隆寺「創建記事」はどうであろうか。

「創建記事」の「東宮上宮聖徳法王」の名称は、明らかに「葉師像記事」から継承されたものである。ならば葉師像成立年と法隆寺創建年(ともに推古15年)の一致も単なる偶然ではなからう。法隆寺創建年もまた、葉師像成立年をヒントに造文されたと考えるのが自然である。「法隆寺資財帳」の筆者は葉師像成立年に法隆寺が完成したという理解に立つて記述を行っているのである。

しかし、筆者の理解が真実であった可能性は万に一つもない。葉師像は丁卯(推古15)年に完成した。それはいいだろう。だがこの時点で像が法隆寺(斑鳩寺)に納入されたはずはないのである。書紀の天智紀の記事がそれを証明している。(この論は古田氏ですでに釈迦三尊像について展開されている)

(天智九年)夜半之後、災法隆寺。  
一屋無余、大雨雷震。  
葉師像が法隆寺にあれば当然、天智九年の火災で焼け、現存しないはずである。葉師像が現存するということはつまり、とりもなおさず推古15年の時点で法隆寺に存在しなかったことを立証しているのである。

結論、葉師像成立の年をして法隆寺創建の年にあてようとした「法隆寺資財帳」の筆者の意図は、最初から崩壊していたのである。

「法隆寺資財帳」は法隆寺の創建について真実を何も語ってはいなかった。では法隆寺(斑鳩寺)はいったいつ創建されたのであろうか。

(その二)で瓦と文献の考察を行い、本稿の核心にせまってみるつもりである。

古田先生と遺跡めぐり  
◎香川・愛媛の古代史  
期日 11月21日(休) 24日(日)  
費用 九七、〇〇〇円

行程 ①東京(特急寝台) ②高松の石清尾山古墳群。四国最大茶臼山古墳。沙弥島・柿本人麿碑など③椀塚古墳。八堂山遺跡。阿方貝塚など④女神石が出土した上黒岩遺跡。古照遺跡―全日空―羽田。

◎古代の東京  
期日 12月8日(日)  
費用 一二、八〇〇円

行程 新宿―都内最大亀甲山古墳。石製模品を多量に出土した大塚山古墳。五島美術館。国立博物館(赤烏元年銘鏡など日本の考古遺物を中心に見学)―新宿  
お申し込み 朝日トラベル  
(03-542-2745)